

短歌の鑑賞指導

中 谷 雅 彦

一 授業のねらい

高校三年間でまとまって短歌の学習指導をする機会は(他の教材と関連させて扱うことはあるが)一度しか持てない。しかも、現行の教科書ではほとんどが一年生で扱うことになっている。そういう意味で、同じ文学教材の学習指導といっても詩や小説とは別のむつかしさがある。この実践報告は一年生で、しかもまとまっては一度しか学習できない短歌の指導方法を求めている一つの実践である。

1 授業構想の視点

短歌の学習の究極の目標は、「ことばに対する感覚をみがく」とであり、そのためには、次のような具体的な指導目標があると思われる。

- ① 短歌の鑑賞のしかたを理解させる。
 - ② 多くのすぐれた短歌を読み、短歌に親しませる。
 - ③ 近代短歌史を理解させる。
 - ④ 自ら進んで短歌を鑑賞する態度を養う。
- 次に短歌教材についてであるが、現行の現代国語の教科書のばあい、次のような教材化の類型がみられる。

A 短歌のみ(多くの歌人の歌を文学史的に羅列)

B 評論・随想と短歌

a 評論・随想と多くの歌人の歌

b 評論・随想と一歌人の歌

高校一年で扱うということ、短歌に親しませようということを考えて、やはり親しめるような随想的なものと、すぐれた、内容的に興味をもてる多くの短歌という組み合わせの教材化がいいのではないかと思う。多くの短歌をとりあげる場合の教材化の視点としては次の四つのことが考えられると思う。

ア 学習者の生活意識に近い素材・テーマの短歌である。

イ その歌人の代表的なすぐれた短歌である。

ウ 戦後の現代短歌もとり入れる。

ニ 文学史的な観点もとり入れる。

この点、筑摩書房「現代国語1」の短歌教材の場合、「『無名者の歌』抄」(近藤芳美・「朝日歌壇」投稿歌十七首とその解説)は、どのような生活・意識から短歌が生まれたかが簡潔にわかりやすく解説されており、学習者には興味の持てる教材だと思われるし、「死にたまふ母」(斎藤茂吉・十三首)は、一歌人の歌の一つのテーマのもとに深く読み味わうには好教材だと思われる。「いのちひとむきに」(吉野秀雄、木下修、佐藤佐太郎、宮柊二のもの十

二首)は、戦後活躍している歌人のものであり、戦前の著名な歌人の短歌をどう扱うかが問題になる。

次に短歌鑑賞の方法についてであるが、私のこれまでの短歌学習指導の拙い実践をふり返ってみると次の四つの方法をとってきたように思う。

- ① 教科書教材の解釈・分析
- ② 教科書教材と参考作品(同一歌人の他の歌、同一素材・テーマの他の歌)の重ね読み
- ③ 数人の歌人の中から一歌人を選び、グループで研究・鑑賞
- ④ 教科書教材、発展として他の歌人の歌を一つの視点を定めて鑑賞

これらの方法で試みた実践が、学習者のことばに対する感覚を鋭くしたかどうか、短歌に親しみを持ち、さらにどんどん短歌を読んでみようとする意欲を持たせることになったかどうかという点になると、まだまだであると言わざるを得ない。

2 授業の構想

これまで述べてきたような授業構想の視点に立って、次のような三部からなる授業の構想を立てて授業に入った。中心はⅢ部におくことにした。

Ⅰ部 「『無名者の歌』抄」の鑑賞……短歌は身近かな生活を歌う

ものであることを知る。鑑賞の手順を理解する。(一斉学習)

Ⅱ部 「死にたまふ母」の鑑賞……一歌人の歌を深く味わう。(グループ・一斉学習)

Ⅲ部 多くの短歌を鑑賞……短歌に親しむ。(グループ・個別学

習)

二 授業の実際

1 指導目標

- (1) 多くの短歌を鑑賞することにより、短歌に親しませる。
- (2) すぐれた短歌を鑑賞することにより、ことばに対する感覚を鋭くさせる。

(3) 短歌鑑賞の手順を理解させる。

(4) 近代短歌史の概略を理解させる。

(5) 自ら進んで短歌を鑑賞する態度を養う。

2 授業の実際

(1) 対象 一年七組(男26名・女19名)

(2) 授業時間 十一時間(54年9月10日～10月13日)

(途中 読書感想文の相互評価の時間をとる)

(3) 教材

。「無名者の歌』抄」(近藤芳美)・「死にたまふ母」十三首(斉藤茂吉)(現代国語一・筑摩書房)

。現代短歌50選

。「近代短歌」(『日本文学史』八第一学習社Vより)

(4) 授業の経過

時間	学 習 目 標	学 習 活 動
1 (10%)	<p>1 短歌学習への意欲を持つ。</p> <p>2 短歌の世界が自分たちの生活に身近かなものであることを認識する。</p> <p>1 短歌学習についての予備調査に答える。 △項目▽ (一) 中学ではどのような短歌の学習をしましたか。おぼえている短歌・学習方法を書きなさい。 (二) 次の短歌を知っていれば、あとをつづけなさい。 ① ふるさとの訛なつかし停車場の() ② 東海の小島の磯の白砂に() ③ 白鳥は悲しからずや() ④ 幾山河越え去り行かば寂しさの() ⑤ 死に近き母に添ひ寝のしんしんと() ⑥ 金色の小さき鳥のかたちして() (三) どのような内容の短歌をいろいろと読んでみたいですか。 2 「『無名者の歌』抄」を朗読 3 最も印象に残ったものを一つ選び、鑑賞文を書き提出。</p>	<p>指導の意図・留意点・評価など</p> <p>1 短歌学習に興味を持たせるのがねらいなので、あまり細かくは要求しなかつた。 (一) 記憶のあいまいな短歌にはこちらが答えていった。和歌もいいことにした。憶えているもののほとんどが万葉集、百人一首からのものであり、近代短歌はわずかであった。 (二) ①④⑥の短歌は数名のものが憶えていたが、他は一人も知らなかつた。 (三) 「自分たち世代の心情をよんだもの」、「美しい自然」などと数名のものが書いていただけであった。 2 いいなと思う歌をチェックするよう指示した。 3 時間が十分なかつたので、ほとんどのものが翌日提出した。</p>
2	<p>1 短歌の世界が自分たちの生活に身近かなものであることを認識する。</p> <p>2 短歌鑑賞の手</p>	<p>1 短歌鑑賞の手順として、次のことをおさえた。 ① 正確に読む。② 難解な語句は調べる。③ 句切れに注目し、短歌の構成を考える。④ イメージを広げる。 (時刻・場所・姿・表情・年令などを</p>

2 (9/14)	4 (9/29)
<p>順を理解する。</p>	<p>1 表現をおさえながら、作者の心情を読みとる。 2 「死にたまふ母」における歌風の特徴を理解する。 3 心情にあった短歌の朗読をする。</p>
<p>2 鑑賞の手順にそって、学習者がとりあげた数の多い短歌の順に鑑賞する。 その短歌をとりあげた学習者を中心に展開。鑑賞文はそのつど紹介した。</p>	<p>◇「死にたまふ母」の鑑賞 (1) (図書館でのグループ学習) 1 齊藤茂吉の紹介 2 「死にたまふ母」の範読および学習者による朗読 3 十三首を時間の経過にそって五つのグループに分け、それぞれに題目をつける。 4 各グループ (班ごとに、五つのうち一つを選び、学習ノートに従って二首を鑑賞。) (グループ別担当は次のようになった。) 。 婦郷……二首……1、4、7班 (各班5名) 。 看病……四首……2、9班 。 臨終……二首……5、6班 (訣別) 。 火葬……三首……8班 (葬送) 。 納骨……二首……3 班学習ノート上段 (語釈・場面の説明・心情・効果的印象的表</p>
<p>明らかにする。) ⑤ 心情・情景を考える。(感動の中心語句を見つける。) ⑥ 効果的表現 (繰り返し、母音・子音のあらわれかたによるリズム、比喩、擬人法など) 2 とくに、イメージを広げること、表現に注目することを中心に鑑賞をすめた。</p>	<p>1 一学期に学習した「ドクトルマンボウ昆虫記」(北杜夫)と関連させて紹介した。 4 齊藤茂吉に関係のある図書資料を紹介した。</p>

9 (10 $\frac{1}{2}$)	8 (10 $\frac{1}{9}$)	7 (10 $\frac{1}{6}$)	6 (10 $\frac{1}{3}$)	5 (10 $\frac{1}{2}$)
<p>4 自ら進んで短歌を読む態度を持つ。</p>	<p>3 感想を整理して簡潔的確に表現する。</p> <p>2 それぞれの歌人の歌風の特徴を理解する。</p>	<p>1 いろいろな短歌に親しむことにより短歌に親しむ。</p>		
<p>4 選んだ七首を暗唱。</p> <p>3 好きな歌、いいなと思った歌を七首選び、それぞれについて、または三文で鑑賞文を書き、提出。(一部、家庭学習)</p> <p>2 分類したものを全体で検討(教室での一斉学習)</p> <p>1 自然・光景への驚き・感動 。青春の心(恋心・友情・青春讚美など) 。生活(生活苦・病苦) 。人生(人生・自分の生き方への思い) 。肉親・妻への愛 。郷愁 。その他(右の分類項目に入れてくいのもの)</p>	<p>4 学習ノートの提出。</p> <p>3 「死にたまふ母」(「赤光」)全五十九首をプリントで紹介。</p> <p>2 感情を込めて朗読。(13名に指名)</p> <p>1 「死にたまふ母」の鑑賞(2)</p> <p>担当した短歌について班ごとに報告し、全体で検討。</p>	<p>4 学習ノートの提出。</p> <p>3 「死にたまふ母」(「赤光」)全五十九首をプリントで紹介。</p> <p>2 感情を込めて朗読。(13名に指名)</p> <p>1 「現代短歌50選」の鑑賞 「現代短歌50選」のプリントを配布。(注)次のような素材テーマによって分類する。(図書館でのグループ学習)</p>	<p>4 学習ノートの提出。</p> <p>3 「死にたまふ母」(「赤光」)全五十九首をプリントで紹介。</p> <p>2 感情を込めて朗読。(13名に指名)</p> <p>1 担当した短歌について班ごとに報告し、全体で検討。</p>	<p>現について)はグループで検討し、下段(鑑賞文)は各個人が書く。</p>
<p>3 鑑賞文を書くポイントについてはほとんどふれず、最も好きなものを最初に書かせた。(アンソロジー作製のた</p>	<p>3 難解な語句・表現には、少し説明を加えながら朗読した。</p> <p>2 ゆっくりと感情をこめて一首を二回朗読させた。</p> <p>1 朗読・説明・鑑賞文の発表というように、担当した歌については個人的に全員に指名した。</p>	<p>1 図書館の資料を紹介し、利用させた。</p> <p>また、その他の参考資料として、「日本文学史の研究」(第一学習社)より、正岡子規、与謝野晶子、伊藤左千夫、長塚節、斎藤茂吉、石川啄木、若山牧水についてのプリントを配布し、利用させた。</p>	<p>1 図書館の資料を紹介し、利用させた。</p> <p>また、その他の参考資料として、「日本文学史の研究」(第一学習社)より、正岡子規、与謝野晶子、伊藤左千夫、長塚節、斎藤茂吉、石川啄木、若山牧水についてのプリントを配布し、利用させた。</p>	

11 (14)	10 (1913)
<p>短歌に親しみ、短歌への認識を深める。</p>	<p>1 近代短歌史の概要を理解する。 2 短歌の学習をふり返り、自分なりに得たものを確認する。</p>
<p>「私の好きな一首」(アンソロジー)を作製(表紙は学習者各自がつくる。)し、それをみんなで読み合い、感想文を書く。</p>	<p>1 近代短歌史の概要を説明。(一斉学習)(文学史のプリント三枚を資料とした。)</p> <p>2 「短歌の学習をふり返って」を書く。 一 このたびの短歌の授業では八十四首鑑賞したのであるが、それらの中で最も印象に残っている短歌はどれですか。一首書きなさい。 二 短歌の授業をふり返って、次の項について、自由に書きなさい。 (1) 親しむことができましたか。 (2) 短歌というものについて考えること、感じるところがあれば書きなさい。 三 短歌の鑑賞のしかたについて (1) 今回わかったこと (2) 疑問点 四 授業の方法について (1) 「死にたまふ母」の鑑賞(班で二首選定鑑賞 全員報告)のばあい。 (2) 「現代短歌50選」の鑑賞(グループで分類・発表・七首選び鑑賞文を書き暗唱)のばあい。 五 その他自由に。</p>
	<p>1 とくに写生派と耽美派を中心に簡単にふれた。 また、戦後の短歌の叙情的特質については、近藤芳美の「裾ひろくクロロバーの上に坐りゐる汝を白じらと残して昏る」と、宮柊二の「生きゆかむ苦しさ知らず陽に灼けし昼の上に子は眠りをり」をとりあげて説明した。 2 時間が十分でなかったために、ほとんどのものが放課後や次時に提出した。</p>

(注) 「現代短歌50選」の内容

(1) 教材採録の視点

①学習者の生活意識に近いもの ②その歌人の歌の中で著名な
すぐれたもの ③文学史な配慮もする。 ④現代の短歌は教科
書教材「いのちひとむきに」から採る。

(2) 短歌

正岡子規(5首) 与謝野晶子(7首) 伊藤左千夫(3首)
長塚節(3首) 島木赤彦(3首) 齊藤茂吉(3首)
石川啄木(10首) 若山牧水(7首) 北原白秋(3首)
吉野秀雄(2首) 木修(2首) 宮柊二(2首)
佐藤佐太郎(2首) 近藤芳美(2首)

三 学習の実態

1 「無名者の歌」抄の鑑賞

(1) 好きな歌としてとりあげたもの

①やがて死ぬ娘にてあれど生業の靴つくりやり枕べに置く(8人)

②夏草に友と夢みしサークル誌実現せず受験近づく(6人)

③白馬岳に雪は来たらし貨車を押す朝肌にしむ白馬おろしは(6人)

④思慕告げず別れ来し吾を潔しと思えど湧き出する悲しみに泣く(5人)

⑤一日の乗務を終えて洗車する満天の星の下われは小さし(3人)

⑥白つつじ雪崩るごとく咲く路を素足に踏みて苗を植えに行く(3人)

(3人)

⑦我をうとみ押し入れにこもる少年を幼名に呼びて涙わき出づ(3人)

(3人)

(以下略)

学習者は、比較的率直なよみ方で心情のよくわかる歌(①⑤の歌)や、自分たちの生活意識に近いもの(②④の歌)、表現のあざやかな歌(⑥の歌)などを多くとりあげていた。

(2) 鑑賞文より

近藤芳美の解説があるためか、心情はよくとらえている。たとえば、①の歌に関しては、「悲しい歌だったのでくに心に残りました。重い病気で寝ている娘の横で父親が娘を見つめてすわっている。物音ひとつしない静かな淋しい状況が感じられる。」(Y女)というようにイメージをふくらませているもの、また②の歌について「作者は僕も高校生だと思った。受験というものは僕たちにもすぐにやってくる。その中でサークル誌が夢におわってしまった。そんな悲しみのようなものが感じられる。実際、青春というものは長いようで短かいのであろう。作者のこのような気持ちがよく伝わってくる気がする。」(H男)のように自己とのかかわりを書いているもの、また、⑥の歌を「山にかこまれた春の田舎に、白つつじがあまりにも白く咲いていて、作者の苗植えに行く足がとても軽くすがすがしいような感じがした。それとともに何か田舎の草のにおいがしてきそうな歌だと思う。人が造ることのできない美しさいつも接している作者の生活の充実や満足がしみ通ってきそう。足がひんやりとするみたい。なんだか自分もその場においてその景色を前にしている」と錯覚してしまっそうです。」(K女)と、とらえて短

歌の世界に没りきっているなどのように、情景・心情はよくとらえて書いているものが多かった。

しかし、ことは、表現に着目している鑑賞文というものはほとんどなかった。

2 「死にたまふ母」の鑑賞

(1) グループ学習

学習ノートの手順にそってそれぞれの担当の歌を鑑賞したのであるが、「死に近き母に添ひ寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる」と「のど赤き玄鳥ふたつはりにゐて足乳根の母は死にたまふなり」の二首の表現の特色を考察するのは困難だったようである。

(2) 鑑賞文より

「『無名者の歌』抄の鑑賞とやや違って、たとえば、『吾妻山に雪かがやけば』という母の住んでいる国の象徴を出すことによつて、母の国への思いがつきあがってくる。また、これによつて、

『入りにけり』という言葉がより強調されている。』(H男)とか、『母のそばで寝ている作者は、寝入ることもできず、母との思い出が頭の中をめぐっているのだろうか。遠くの田からかえるの音が聞こえてくる。作者は、いつもとはかなり違った静けさを感じているのだろうか。』(M男)や、また、『のど赤き玄鳥』というところから燃えるような生命感を感じる。そして、『足乳根の母は死にたまふなり』と、悲しみのことばを続けている。そこから母の死がいっそう深く悲しいものに感じられる。』(I男)とか、『田舎のとても粗末な火葬風景が目につかぶ。そして、赤々と燃える火の中で母は

灰と化していく。『星のある夜空のもと』のところでは、母の火葬を前提とした作者の母に対する祈念と深い感慨がこめられているような気がする。』(H男)などに見られるように、心情や情景にとどまらず、効果的・印象的表現への着目がかなり見られ、学習効果があうかがわれるように思われた。

3 「現代短歌50」の鑑賞

(1) 分類に関して

54首を叙景と叙情に分類するという方法に問題があったためか、「なにとなく君に待たるるこちして出でし花野の夕月夜かな」(与謝野晶子)「おとろへし蠅の一つが力なく障子に這ひて日はしづかなり」(伊藤左千夫)「白鳥はかなしからずや空の青海の青にも染まずただよふ」(若山牧水)「かたはらに秋草の花かたるらくほろびしものはなつかしきかな」(若山牧水)「春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕」(北原白秋)「わが吐きし血を土にうづめ居る妻よその夕崗に割烹着白く」(吉野秀雄)「生きゆかむ苦しき知らず陽に灼けし畳のうへに子は眠りをり」(宮終二)「裾ひろくクローバーの上に坐りある汝を白じらと残して昏るる」(近藤芳美)などの歌は分類しにくかったようであるが、全体としてはスムーズに楽しく学習できたようであった。

(2) 鑑賞文について(鑑賞文より)

好きな歌、いいなと思った歌を七首選び、それぞれについて二、または三文で鑑賞文を書かせたのであるが、もつとも多くのものごとりあげたのは石川啄木や若山牧水の歌で、とくに「新しき明日の来るを信ずといふ自分の心に嘘はなけれど」と「白鳥は悲しからず

や空の青海の青にも染まずただよふ」が多かった。また、鑑賞文の内容についてであるが、たとえば、「一つの動作があらゆる喜びや悲しみを含んでいて、同じ人生の悲しみを持つ人間としての一瞬の心の通じ合いが感じられる。一握の砂にやるせない青春の乾きを感じる。」(K女)のように表現がよくねらわれているもの、また、

「この歌は啄木が生活に苦しみ疲れていた頃の作品である。歌の中で希望を捨てないことを『新しき明日の来るを信ず』と表わしているが、『新しき明日』という表現は、ほんとうに希望そのものという感じでも好きだ。しかし、その意志を結句で否定形にするほどの生活の苦しみとはなんとも悲しいものだ」(Y女)のように調べ、表現をきちんとおさえて書いているものもいたが、「故郷の東北をなつかしがつて上野の駅までやってきた作者が、東北の人がしゃべることを聞いて郷愁にひたっている。」(N男)や、「秋の夕暮れ、作者は人目をさげながら歩いてゐる小狐を見た。小狐は陽をいっばい体に受け、赤や黄や青などの光をはなっていた。やがて、どこかのお寺の時を知らせる鐘の音が聞こえ、小狐の光は鐘の音とともにしだいに消えていった。(I男)のように、情景の説明だけのものや表現が十分ねらわれていないものがかなり見られる。これは、鑑賞文の書き方・ポイントについて具体的に示さなかったことと、時間が十分に推考できなかったことによるものと思われる。

(3) 暗唱について

自分が選び、鑑賞文も書いており、また、七首というのがそれほど困難な数ではなかったためか意欲を持ってとり組み、七名だけが

やり直しをしたにとどまった。ただ、その短歌の心情にそった暗唱はほとんどなされなかった。

(4) 「私の好きな一首」(アンソロジー)の作製・鑑賞について
①表紙

各自が選んだ七首のうちのさらに最も好きな歌一首(鑑賞文を付す)を集めたものであるが、表紙は各自に考えさせた。次のように、歌の中のことばとか好きなことばなどいろいろであり、カットなどを入れたりしてそれぞれにおもしろいものを作った。(数字は出席番号)

- | | | | | |
|----------|----------|---------------|------------|---------|
| 1 紅の薔薇 | 2 犀銘 | 3 白鳥の死 | 4 カロキハハ | 5 一匹の蝮 |
| 6 永遠の詩 | 7 旅立ち | 8 随想録 | 10 青春の一点 | 11 うすべに |
| 12 永遠の翼 | 13 山桜 | 14 現代の目 | 15 一握の砂 | 16 一握の砂 |
| 17 17 | 18 17 | 19 17 | 20 17 | 21 17 |
| 21 たはむれ | 22 翔舞 | 23 THE BEST 1 | 24 感動そして感激 | 25 |
| 目をとじれば | 26 青春の一冊 | 27 無題 | 28 新しき明日 | 29 白鳥は |
| 哀しからずや | 30 夕月夜 | 31 こころ | 32 来夢 | 33 光 |
| 34 雪原 | 35 | 36 嵯峨の鐘 | 36 むつみ | 37 あこがれ |
| 38 こころ | 39 杏ノ里 | 40 感 | 41 翼 | 42 白鳥 |
| 43 はとぼっば | 44 あした | 45 A 31 SYLLA | | |

BLE JAPANESE POEM

②感想文より

「私の好きな一首をお互いに読み合ったあと感想文を書かせたのであるが、クラスメイトの選んだものであり強い関心を示し、また、ほとんどのものが次のような感動を示していた。

a みんなの考え方がわかっておもしろかった。特にたくさんの

人が書いていた「たわむれに……」の歌は人によつていろいろな受け取り方があり楽しかった。一人一人の心の豊かさみたいなものもわかつておもしろかった。(D男)

b みんな一生懸命苦心して書いたのであろう。それだけに、良く作品を理解していると思う。自分にとって「あんな作品がよいのか」というようなものでも人は選び、その鑑賞文を読んでみると「なるほど」と思わせる。一生の思い出になるように……。(N男)

c みんなそれぞれほんとうにいい一首を選んでいると思う。鑑賞文もそれぞれの詩の内容をよくとらえているのではないかと思う。短歌というものは、たった三十一文字の中に情景・感情すべてをうたいこまなければいけないので、みやすそうでほんとうにむずかしいものだと思った。それゆえに一首一首ほんとうにあじがある。(K男)

d みんなが選ぶような歌はなんとなく限られているようだ。だけれど同じ歌でも人それぞれ違った感想があり、こういう解釈もあるのかと思うようなものもありました。栗原さんの鑑賞文がとてもよかったと思う。よくイメージじびつたりの言葉がでてくるものだと思う。(T女)

4 短歌学習全般について……アンケートより

(1)最も印象に残った歌

「無名者の歌」「死にたまふ母」「現代短歌50選」と、全部で84首学習してきたのであるが、次のように、45名中34名のものが「現代短歌50選」の中から選んでいた。

。白鳥は哀しからずや空の青海の青にも染まずただよふ(9名)
。たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三歩あゆまず(5名)

。みちのくの母のいのちを一日みん一日見んとぞただにいそげる(4名)

。新しき明日の来るを信ずといふ自分の言葉に嘘はなけれど(3名)
。死に近き母に添ひ寝のしんしんと遠田のかはず天に聞こゆる(2名)

。頬につたふ涙のごはず一握の砂を示しし人を忘れず(2名)
。なにとなく君に待たるるこちして出でし花野の夕月夜かな(2名)

。雪原の真日の明かりに舞ひいでて白鷺の群れかがやきにけり(2名)
。しらしらと氷かがやき千鳥なく鉦路の海の冬の月かな(2名)

。裾ひろくクロバーの上に坐りゐる汝を白じらと残して昏るる(2名) (以下略)

(2)短歌に親しむ

親しむことができた 31名 だいたい親しむことができた 8名 親しむことができなかった 6名

(3)短歌というものについての考え

◇ 三十一文字の中にあれだけの感情・情景をおりこめるといふことはすばらしい。

◇ 三十一文字の中に自分の感動を強く表現することはむずかしいが楽しい。

◇ 短歌はまさに生活から生まれてくるもの。

◇ 短歌の中に使われていることばの深さにおどろいた。

◇ 短歌を読むときのリズムが好きだ。

◇ 卒直に歌われているような短歌にもいろいろな技巧があることに驚いた。

(4) 授業の方法および今後の短歌学習について

。 時間を十分かけてじっくり味わいたい。(とくに「現代短歌50

選」のばあい)

。 生徒が選んだ短歌を教材にする。

。 短歌を授業の中でつくってみる。

。 暗唱は非常に有効であった。

四 反省と課題

1 学習(指導)の中心目標を明確にする。

「現代短歌50選」の学習を中心にして、短歌に親しむということに目標をしばらくとしたのであるが、それまでに時間をかけすぎ、あれもこれもという欲張った授業展開になってしまった。もっと焦点を定めるべきであった。

2 教材について

いろいろな視点から多くの教材を選んで学習したのであるが、生徒が意欲を持って深く読み味わうにはテーマを設定した教材化(たとえば、「青春の心」「自然」など)がなされるべきではなかったのかと思われる。

また、生徒の印象に残った短歌として、啄木や牧水を多くあげて

いるのであるが、現代短歌をもっと教材化し、新しい短歌への目を開いてやることも必要なのではないかと思う。

3 鑑賞の方法について

(1) 「私の好きな一首」を授業の出発点に

自分たちが選び書いたものを教材とした「私の好きな一首」を読み合う時、生徒たちはかなりの意欲と関心を示した。意欲を持って主体的に学習に参加させるためには、学習者もと組んだ自主教材を授業の出発点にもつてくると効果的であると思われる。

(2) 鑑賞文について

このたびの短歌の学習ではアンケートを含めると五回も鑑賞文を書かせたのであるが、書くことがやや多すぎ、書きづらい生徒もいたようである。授業展開の中で「書く」こと的位置づけを明確にし、さらに、鑑賞文の書き方についても事前にきめ細かい指導が必要であったと思う。そうしないと書くことを通して読み・鑑賞を深めるということにならないし、学習意欲を後退させることにもなりかねないと思われる。今後の課題としたい。

(広島県立安古市高等学校教諭)